

『古代アメリカ』18, 2015, pp.103-116

<調査研究速報 特集>

守るべき遺産、活用すべき資源

ーメキシコ、 Cholulaにおける文化的景観をめぐる行政と市民連帯^(註1)ー

小林貴徳
(関西外国語大学)

はじめに

本稿は、遺跡を内包する都市景観に向けられた「活用すべき資源」と「守るべき遺産」という異なるまなざしに焦点を当て、文化の資源化をめぐる行政と地域住民のあいだの隔たりについて検討するものである。文化の資源化とは、文化を意識的に操作、育成し、社会で何らかの目的で活用できるようにすることを指すが、その過程には多様な社会的主体（アクター）が参与する構図が浮かび上がる^(註2)。山下が論じているように、文化の資源化をめぐる課題は、「誰が、何のために、誰のために、文化を資源化するのか」という主体の問題であり、「ある主体にとっての文化の資源化は必ずしも他の主体を満足させるものではない」ことに留意しなければならない [山下 2007: 60]。

文化の資源化に関わる社会的主体のうち、本稿ではとくに地域住民の動向に注目したい。ただし地域住民といっても、この「住民」が多様であることに十分な注意を払わなければならない点は、アンデス地域における文化遺産の活用をめぐる関 [2014: 173-177] の議論からも明らかである。

本稿では、メキシコ中央部に位置する都市 Cholula の遺跡を舞台に繰り上げられる、行政による観光開発と住民による抵抗活動という、官対民の構図を扱うこととなる。そこではやはり「民」の多様性について適切な検討が求められるだろう。行政主導の開発に抗する住民連帯の生成は、Cholula の都市景観にどのような変化をもたらすのだろうか。資源の活用と遺産の保護のあいだに揺れる多様な社会的主体をめぐって、課題と展望を示したい^(註3)。

1. 事例の経緯

メキシコの中央部に位置するプエブラ州には、一片約 400 メートル、高さ 65m におよぶ米大陸最大規模のピラミッド型建造物がある。サン・ペドロ・ Cholula (San Pedro Cholula : 以下、サン・ペドロと略記) とサン・アンドレス・ Cholula (San Andrés Cholula : 以下、サン・アンドレスと略記) という二つの行政区の境界線に位置する古典期の遺跡は、 Cholula の大ピラミッド、トラチウアルテペトル (*Tlachihualtépetl*: ナワトル語で「手作りの山」) として知られる。

遺跡の頂には 17 世紀に建造されたレメディオスの聖母寺院(el santuario de la Virgen de los Remedios)があり、多くの信者にとって信仰生活の中心となっている。市街地に位置するものの、遺跡の周囲にはマリーゴールドやトモコロシが栽培された畑が広がり、都市域にのどかな田園風景を生み出している(図版1●)。



図版1 チョルーラの大ピラミッドと聖母寺院(筆者撮影)

2012年10月、大ピラミッド中腹の広場に連邦政府観光省(SECTUR)長官、プエブラ州知事、サン・ペドロおよびサン・アンド

レスの両市長はじめ多くの役人や市民代表が集まり、チョルーラの「プエブロス・マヒコス・プログラム(Programa Pueblos Mágicos: 魅惑的な町)」認定の記念式典が開催された。「プエブロス・マヒコス」とは、持続的開発や地域住民の社会参加を促す取り組みとして連邦政府が推し進める観光開発認定制度である。同プログラムへの登録に向け準備を進めてきたチョルーラの行政当局にとって、この式典は長年の努力の結実を意味していた。住民の多くは、この認定が官民一体による地域経済活性化の起爆剤となるだろうと期待していた。

ところが、プログラム登録から2年も経たない2014年8月26日、大ピラミッド脇では、遺跡周辺の土地を金網で囲い込もうとする警察隊とそれを押し返す住民との小競り合いが起きた。その2日前には、およそ2000人が遺跡周辺に集まり、互いに手を結んで遺跡を取り囲む「人間の鎖」が行われていた。ロウソクを持って祈る参加者にまぎれて、「官有化反対」、「土地は譲らない。伝統は売らない」、「われわれの遺産を守ろう」と記されたプラカードを掲げる人も見られた。

これらの出来事はプエブラ州政府が進める開発計画に端を発したものだ。2013年から州内開発計画(註4)を本格化させた州知事は、チョルーラの遺跡周辺へのテーマパーク建設案を発表し、行政当局は、「公共の利益に結びつく資源の有効活用」を根拠に遺跡周辺の農地区画の官有化に踏み切ったのである。

一方、チョルーラでは、多くの住民が遺跡の周りの花畑は幼少期から眺めてきた都市の伝統的景観の一部であると口をそろえる。農地の所有者にいたっては、土地を「祖先からの遺産(herencia ancestral)」や「われらの慣習(nuestra costumbre)」だと表現する。テーマパーク建設の通達はまさに寝耳に水だった。

そんなとき、遺跡や寺院を取り巻く景観を都市の「守るべき遺産」と主張する住民有志が、市民連帯「チョルーラを守る連絡会(Círculo de Defensa Cholula)」(以下、「連絡会」と略記)を立ち上げた。土地の官有化という行政の暴走に歯止めをかけるべく生じた「連絡会」は、住民不在の政府案に異議を唱える市民を巻き込み、遺跡を取り囲む「人間の鎖」へとつながった。

以下、本稿では、メキシコにおける文化遺産に絡む観光開発がどのように現在にいたるのか時代

背景を検証し、そのうえで 21 世紀型観光開発として連邦政府が打ち出した認定制度「プエブロス・マヒコス」を文化の資源化の文脈に位置づけたい。続いて、同制度の認定により地域の活性化を促進しようとするサン・ペドロとサン・アンドレスという二つの Cholula の都市の関係、少し先取りして言うならば、両者のあいだに存在する歴史と文化的伝統をめぐる対抗意識について論じる。最後に、資源の有効活用を根拠とする行政の観光開発と、それに抗する住民の連帯に着目し、文化的景観が失われるかもしれないという危機的状況に生じた「守るべき遺産」という意識が地域住民のあいだにどのように共有されているのか明らかにする。

2. 転換期を迎えたメキシコの観光開発

メキシコ革命以来、約 70 年にわたって政権を担った制度的革命党(PRI)は、観光開発を通じた国家イメージ形成として二つの舞台を選択した。ひとつは「太陽とビーチ」であり、もうひとつは「古代文明の遺跡」である。前者は、高層ホテルに多様なアクティビティ、国際的な空港や港湾に象徴される、高度に成長したメキシコの現在と未来を示すものであり、後者は、古代の先住民が創り出したメキシコの神秘的な過去を映し出すものだった [Velázquez 2013: 107]。海浜ツーリズムと遺跡ツーリズムは、20 世紀を通じてメキシコのイメージを内外に表明する好都合な、そして外貨獲得に有効な産業となった。

ところが大規模な開発やマスツーリズムの肥大化が進むにつれ、主要観光地では地域社会に与える負の影響があらわれ始めた。大規模なインフラ整備による環境破壊や、観光業の成長による水資源の枯渇や汚染はとりわけ深刻な問題とされた。遺跡や海浜といった観光資源の有無が地域間格差を生み、資源をもたない地方都市や農村、先住民居住地域は経済成長から取り残されることになった。観光化の進んだ地域でも観光による利益再分配の不均衡が生じた。地域住民の観光業への参加は露店や行商のようなインフォーマルな関与に限られ、多くの住民は観光開発の恩恵を十分に受けられていないというのである。

こうした問題は、国家主導による大型開発や経済成長優先主義への批判として表れ、地域間格差の是正、環境保全を考慮した持続可能な開発、地域住民の参加を促す産業の育成と定着という課題が政府に突き付けられた。

21 世紀の幕開けとともに政権与党に就いた国民行動党(PAN)は、こうした問題へ対処するべく、国家成長戦略として観光開発政策の抜本的見直しに取り掛かった。フォックス政権は、政策大綱『国家開発計画 2001-2006』において、経済活性化の有効手段として観光産業の成長を掲げた。そこでは、政府が進める観光開発は、財源と権限の地方分権による観光の多様化と分散化を目指すものであり、バランスのとれた地方創生の原動力にならなければならない点、持続性をキーコンセプトに地域社会の自律性を担う人材の育成や仕組みの構築を目指す点が強調された [Gobierno de los Estados Unidos Mexicanos 2001: 120-122]。また観光省は、これからの観光開発は環境保全を指向し自然と人間の共生や調和を実現しなければならないとする 21 世紀型観光開発の基本方針を『国家観光プログラム 2001-2006』で明示した [SECTUR 2001: 52, 121]。

そうした姿勢はフォックス政権後もカルデロン政権(2007-2012)に継承された。二期 12 年におよぶ PAN 政権の観光政策の特徴は、(1)環境・社会・文化を調和させた持続的開発(経済開発重視から

社会開発重視へのシフト)、(2)地域住民の社会参加や資源管理によるまちづくり（人材育成や社会教育の実践）、(3)新たな資源の創出と文化遺産を尊重した文化ツーリズムの促進を理念とした点である。

3. 21世紀型の観光開発

マスツーリズムの展開と無計画な観光開発がもたらした弊害への反省を踏まえ、観光省は2001年、21世紀型観光開発の具体案として「プエブロス・マヒコス」プログラムを創設した。

このプログラムは、有形無形を問わず地域社会に受け継がれる潜在的な資源を掘り起こし、持続的開発の振興をねらいとするものである。プエブロ・マヒコ（単数形）とは、固有性や象徴的特性が際立つ資源、魅惑的な力を備えた地域社会（あるいは市町村 *localidad*）を指す。ここでいう資源とは、遺跡や建造物といった有形遺産から、歴史や伝説、文化伝統、祝祭や民俗芸能、工芸品、名産品や料理、街並みなど無形遺産、民俗遺産、文化的景観まで多様な対象を含む、いわば地域社会に伝わる遺産、すなわち地域遺産(*patrimonio local*)のことである [SECTUR 2007: 5]。

「プエブロス・マヒコス」は、地域社会に対して政府が認定を与える制度であり、その手続きはユネスコの世界遺産リスト登録に類似している。認定を求める地域社会は州政府と協力して準備を進め、観光省など連邦政府機関の審査を受けなければならない。

観光省が定める条件には、地域遺産に関する規定のほか、地域社会の立地や既存のインフラ整備に関する項目も含まれる。さらに、都市景観基盤整備計画書の作成にあたって、地元行政、商工会、ホテル飲食業、国立人類学歴史学研究所(INAH)、有識者会議、市民代表で構成される「準備委員会」を設置する必要がある。つまり申請の前段階で、官民の協働のもと、多様な社会的主体の連携が十全に図られていることが求められる。認定後も関連省庁で構成される外部機関「組織間選考評価委員会」の年次監査が入るため、開発計画の透明性や妥当性が一定程度維持されるといえる [SECTUR 2007: 15]。

認定を受けた地域社会は、公認ロゴの使用許可とともに開発交付金を受ける。観光省と州政府を通じて地域社会に配分される交付金は、おもに都市景観基盤整備（道路・建造物補修、電線類地中化）と、地域経済の活性化（地域中小企業活路開拓事業助成、民間の投資促進）に充てられる。たとえば、2001年から2006年までに政府が付与した直接交付金1.8億ペソ（約1200万ドル）は関連自治体による公的・民間投資を刺激し、同期間に総額5.5億ペソ（約3700万ドル）が地域社会に向けられた [BID 2006: 7]。

こうした交付金の存在もあり、同制度には、創設初年度の2件を皮切りに、PAN政権最終年となった2012年までに計83件が登録された。そのうち教会建築物や鉱山跡といったコロニアル遺産を地域遺産とする件数は全体の7割におよび、海浜やエコツーリズムといった自然遺産、古代遺跡、先住民の伝統文化を地域遺産とする件数がそれに続く^(註5)。

観光省は、本プログラムが21世紀の観光開発として期待される最大の特徴として、地域社会の果たす役割、とくに住民参加を通じた観光資源の掘り起こしを挙げる。住民の積極的な発案による地域社会に埋もれた遺産の活用、すなわち、祝祭や郷土料理など日常のなかで見過ごされがちな文化的伝統に価値を見出し、地域で共有する資源へと転化させる試みである [小林 2014b: 109-111]。

また、そうした取り組みが中央からではなく、地方から発せられるという点では、財源と権限の地方分権を指向する開発事業であるといえる^(註6)。

4. 「聖なる都市」の景観

こうしたなか、2012年10月に認定された Cholula は、制度創設以来はじめて二つの行政区にまたがる プエブロ・マヒコ となった。サン・ペドロとサン・アンドレスの両 Cholura が有する地域遺産は、大ピラミッド遺跡や、レメディオスの聖母寺院をはじめとする植民地期の教会建造物のほか、「聖なる都市(ciudad sagrada)」と呼ばれるほど多くの祭礼が創り出す独特の文化的景観である。

後古典期には雨神「9の雨(*Chiconauh Quiahuitl*)」に捧げる農耕儀礼の場として利用されていた大ピラミッドは、スペイン人による征服直後、その頂に聖母が姿を顕したという顕現譚で知られるようになる [小林 2013: 162-164]。16世紀後半に最初の祠が建設されると1666年には寺院が完成し、植民地期を通じて広域から多くの巡礼者を集めるようになった。

古代遺跡の頂に建てられた聖母寺院は、かつての「魂の征服」の記憶を留める史跡であると同時に、現在なお聖母信仰の重要な聖地である。レメディオスの聖母は Cholura の守護者でもあり、地域住民は聖母寺院が建つ遺跡を親しみを込めて「お山(*cerrito*)」と呼ぶ。朝夕には遺跡の周囲や寺院に続く階段で散歩やジョギングをする市民が目につく。

大ピラミッドは INAH 管理のもと基壇の一部が修復された建造物や遺構で構成される遺跡公園のほか、1930年代の調査の際に掘られたトンネルの一角が一般公開されている。訪問者は古代遺跡を内側と外側から眺めるとともに、遺跡近くに設置された博物館(*Museo del Sitio*)の常設展示を通じて出土した遺物や壁画のレプリカを鑑賞することができる。

植民地期の教会建築物について言えば、遺跡上の聖母寺院のほか、サン・ペドロ側の聖ガブリエル修道院やサン・アンドレス側の聖アンドレス修道院が際立つが、大小さまざまな教会や礼拝堂が基盤の目状に広がる両市内に点在している。それら大小約50の教会は、いずれも日常生活の基盤として地域住民を結び付ける地縁のネットワークであるバリオ(*barrio*)の祭礼組織によって管理されている。

バリオとは明確に区画化された空間概念ではなく、地縁や血縁といった顔の見える関係に基づいた社会集団を指す。その成員は教会管理や祝祭運営を担う祭礼組織へ参加するとともに、祭礼組織内の階層的な役職と人間関係を通じて、またコンパドラスゴ(擬制親族)の結びつきを通じて信頼と相互扶助のネットワークを強化する。バリオは正規成員以外の外部者の介入を許さない閉鎖性を特徴とするが、正規成員とは、数世代にわたってバリオ成員の家系であると他の成員から認められる者を指す。拙稿で論じているように、Cholura のバリオは内部の結束力を強める伝統的な社会集団といえる [小林 2014a: 129-131]。

そうしたバリオがサン・ペドロに10区、サン・アンドレスには8区存在する。各バリオには守護聖人が祀られる教会をはじめ複数の教会があり、各教会内の聖人像の数に応じて個別の祭礼が実施される。バリオの祭礼には、たいてい他のバリオとの協働による聖人像の相互訪問がともない、また、各バリオから聖母寺院に向けた聖人像の行列も実施される。聖人像を担いだ行列が楽隊を連れ、街路をふさぎながら遺跡上の聖母寺院へと進む光景は、地域住民にとって見慣れた光景である。そう

した独特の都市景観こそ Cholula が「聖なる都市」と呼ばれる所以である。

5. 二つの Cholula の対抗意識

しかし、二つの Cholula は歴史と文化的伝統をめぐる競合関係にある。聖母信仰の聖地であるとともに重要な史跡である大ピラミッドが、サン・ペドロとサン・アンドレスの境界線上に位置しているためである。双方の住民はこの歴史的建造物の正統な帰属を主張して譲らない。たとえば、サン・ペドロ側のあるバリオの長老はこう語る。

「われらの祭礼に彼らと呼ぶこともないし、彼らの祭りに呼ばれたこともない。お山はサン・ペドロにあって聖母の祭りもわれらが管理している。彼らが声高に叫ぶのは勝手だが、お山はわれらの遺産だ」。

一方、サン・アンドレスに土地を持つ初老男性は「サン・アンドレスの人は物静かで、サン・ペドロの人とは容貌も異なる。歴史的に見ても外部者との混血の度合いが違うからだ」と説明する。対抗意識や差異性を含む語り口が年長者のあいだで目立つ一方、若年層においてはそうした傾向が弱まる。その理由を、郷土史に関する若者の知識の欠如や無関心に求める年長者は多い。彼らは、この対抗意識は先スペイン期に由来するのだと説明したり、双方の住民は互いに系譜が異なるのだと語る。

たしかに歴史書^(註7)を紐解くと、トルテカ=チチメカ(tolteca=chichimeca)系の民が Cholula に移住した12世紀頃、この地にはすでにオルメカ=シカランカ(olmeca=xicalanca)系の民が居住していたようだ。ピラミッドの南(現サン・アンドレス市)に住んでいたオルメカ=シカランカの民に対し、トルテカ=チチメカの民はピラミッドの北(現サン・ペドロ市)に集落を形成し、彼らの主神ケツァルコアトルを祀る神殿を建てたという [Reyes 2000: 56-61]。

スペイン人による征服後まもなくその神殿を破壊し跡地に聖ガブリエル修道院を建てると、植民地行政は1535年に Cholula に「市」の称号を与えて、一定の自治権を付与されたインディオ共同体として認めた。このとき都市を構成した6つの集住区(カベセラ)のうちサン・アンドレスは、出自の違いを理由に Cholula (現サン・ペドロ)からの離脱を訴え、自分たちの修道院の建設を要求した。その結果、16世紀末には Cholula 市内にもうひとつの修道院(現サン・アンドレス修道院)が完成し、1714年には、サン・アンドレスは行政体としての分離を果たした [Hernández y Martínez 2011: 287-288]。

地域住民が郷土史について歴史学者のような語り方をすることはないにせよ、地域に伝わる断片的な記憶が、二つの Cholula の間に異なる歴史観やアイデンティティを作り上げたとしても不思議ではない。現在では両者の対抗意識は、遺跡や寺院、文化的伝統を継承する正統性をめぐるせめぎ合いとしてあらわれる。とはいえ対抗意識が暴力化することはなく、あったとしても、祝祭からの排除や聖人像行列の経路妨害といった程度である。

こうしたなか、「プエブロス・マヒコス」認定に向けた申請は、二つの Cholula が初めて手を組んだプロジェクトだった。きっかけは行政上の取り決めだったかもしれないが、歴史と伝統をめぐる競合関係を一時保留にして申請準備が始まったのである。官民連携に向け両市の市民代表が参与する代表者会議(mesa directiva)が設置されると、それに女性組織「9の雨(Nueve Lluvia)」、有識者組

織「プロ・チョルーラ(Pro-Cholula)」、公益財団「オマル・ヒメネス財団(Fundación Omar Jiménez)」も加わり、行政の担当部署とともに官民合同の準備委員会が発足した。

観光省の条件を満たすため市街地での再整備が始まると、街路や中央広場が長期間閉鎖された。市民生活に影響が出る工事については批判的な意見も出たが、それでも地域住民は新たな取り組みに対して理解を示し、この試みがもたらさるよう地域活性化に強い期待を寄せるようになった。こうして迎えた2012年10月の認定式典は、官民一体の計画推進が一定の成果に結びついた記念すべき場となったのである(図版2●)。



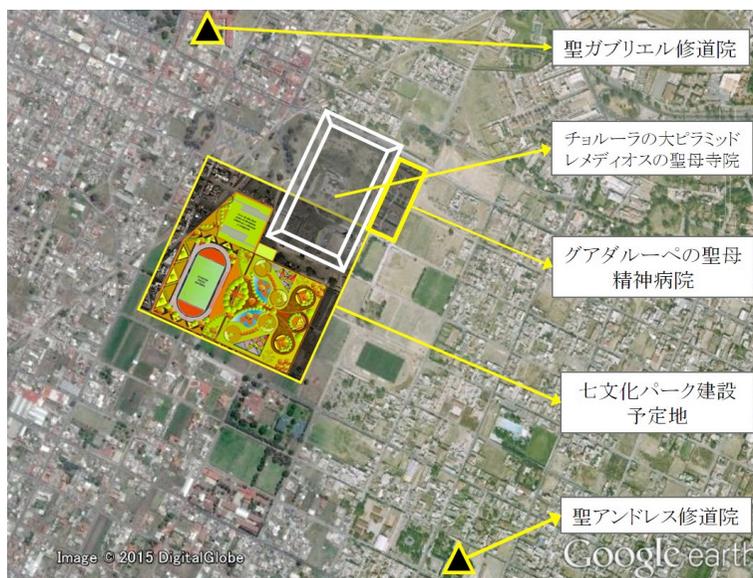
図版2 プエブロス・マヒコス認定の記念式典
[La Jornada Oriente 30/oct/2012]
(左から2番目より、サン・ペドロ市長、観光省長官、
プエブラ州知事、サン・アンドレス市長)

6. 活用すべき資源

プエブロス・マヒコス登録以降、チョルーラでは交付金による変化が目に見えてあらわれた。とくに市街地の景観整備である。サン・ペドロ市では街路沿いの建物の外壁がパステル色塗料で染められ、商店の看板は黄金色に統一された。観光用の2階建てオープンバスの運行も始まった。サン・アンドレス市ではレストランやカフェ、ブティックなど新たな商店が次々と開店し、中規模ショッピングモールも建てられた。州政府の統計によると、チョルーラを訪れる観光客数は、2012年以降、プエブラ市に次いで州内2位に上昇し(2014年には61万人)、2014年の経済波及効果は、これもプエブラ市に次いで州内2位(4億1800万ペソ)となった[Gobierno del Estado de Puebla 2014]。

そうした変化に対し、「プエブロス・マヒコスの効果には偏りがある、われわれが直接恩恵を受けることはない」と批判する住民は少なくなかった。なかには、「聖なる都市(ciudad sagrada)」は「魅惑的な町(pueblo mágico)」に後退したと皮肉の者もいた。それでも多くの住民は観光客の増加が地域活性化に結びついていることや、町の景観が美しくなったことを肯定的に捉えていた。「いずれわれらにも恩恵が届くことを期待する」というのがもっぱらの見解だった。

ところがチョルーラの観光開発は、2014年7月に行政当局が発表した開発計画によって新たな展開を迎えた。遺跡周辺の土地25haを官有化し、そこに行政区間連携の「七文化パーク(Parque de Siete Culturas)」を建設する計画である(註8)。計画書によると、同パークは、遊歩道、人工池や噴水、多目的野外ステージ、レストランや商店が入る商業施設に加え、大規模の駐車場を備えるという。行政当局は、この計画は「遺跡の権威付け(Dignificación del Entorno de la Zona Arqueológica)」を目指すものであり、遺跡や文化的伝統などの地域遺産を地域住民の生活向上のために最大限に活用する点、また、建設計画が環境に与える影響を最小限に留めるという点においてもプエブロス・マヒコスの理念に沿うと説く[Gobierno Municipal de San Pedro Cholula 2014: 14-17]。



図版3 テーマパーク建設予定地（行政の計画書図面をもとに筆者作成）

行政当局によれば、現在のところ該当区画の大半が私有の農地であるため、本計画は「遺跡の権威づけ」という公共の利益を導く資源の有効活用にはかならないという。それにあたって州政府は、『プエブラ州官有化条例(Ley de Expropiación para el Estado de Puebla)』の第一条「公共の利益を目的とする場合の官有化」を適用し、該当区画の現土地権利所有者に対し用地接収を通達した^(註9)。

ところが建設予定地は、1993年に定められた「 Cholulaの遺跡地区に関する大統領令(Decreto Presidencial de la zona de monumentos arqueológicos de Cholula)」の区域(面積154ha)に相当する(図版3●)。この区域は、INAHの管理のもと、遺跡保全のため建物の建設や土地利用の形態が強く制限されている。それを示したうえで行政当局の計画書は、遺産保護条例に反するどころか、遺跡の保全や文化的伝統の尊重、都市景観と周辺環境の調和など、地域活性化を実現する資源の有効活用であると強調する。本計画はもちろんINAHの承認済み^(註10)であるとも記載されている[Gobierno Municipal de San Pedro Cholula 2014: 69-72]。

州知事の肝いりで展開する Cholulaの開発計画はその規模を拡大させている。大ピラミッド脇に位置する「グアダルーペの聖母」精神病院も州政府による官有化の対象となった。20世紀初頭から「神の聖ヨハネ修道会(orden de San Juan de Dios)」によって管理されてきたこの病院も都市景観を作り出す地域の遺産だったと嘆く住民は少なくない。州知事によると、この建物は歴史博物館を併設する高級ホテルへと改装されるようだ^(註11)。さらに、プエブラ市中心部と大ピラミッドを結ぶ近代的な路面電車の敷設案も浮上しており、都市景観の大幅な変化が予想される。

7. 守るべき遺産

「プエブロス・マヒコス」申請時に発足した準備委員会は、行政の開発計画がこの段階に達するまでなぜ放置したのだろうか。この点について準備委員会を構成していた「プロ・ Cholula」のひ

とりは「プエブロス・マヒコス認定が済むと、政府案に意義を唱える市民組織はことごとく除外された。代表者会議に呼ばれる市民代表も行政の意思に同調する者ばかりになった」と眉をしかめた。また、女性市民組織「9の雨」の代表は、「わたしたちの参与も妨げられた。残念ながら組織は解散してしまったが、いまでは他の市民連帯を支援している」と語る。どうやら官民一体の取り組みは、「プエブロス・マヒコス」登録という目的達成を目処に、民を排除した行政主導に切り替えられたようだ。

暴走する行政の開発計画に対して、地域住民は、冒頭で触れたとおり、市民連帯の形成にいたる反対運動として応えた。そのきっかけになった「連絡会」の創設者の一人は次のように語る。

「誰かが止めなければ都市の景観が失われる、そう思ったわたしたち 8 名は行動に移しました。最初のうち人びとは私たちを相手にしませんでした。『おまえたちグエロ(güeros 白人系に対する蔑称)に何がわかる』と言われたこともあった。たしかにわたしはこの町に住んで 15 年、バリオの成員でもなければこの地の出身でもありません。それでも誰よりもこの町を愛している。そんな気持ちが伝わったのか、わたしたちの動きは人びとの共感を生んだ。みな土地を守るために手をとって遺跡に集まってくれました」

2014 年 8 月 24 日、大ピラミッドを囲む「人間の鎖」に集まったのはおよそ 2000 名。●彼らは、バリオの成員や祭礼組織の役職者、市内の商店主や学生を含む、サン・ペドロとサン・アンドレスの両市民だった。それは、遺跡を守ることは歴史の尊重であり、伝統的景観という祖先から受け継いだ遺産を未来へと継承しなければならないとする地域住民の異議申し立ての行動だった(図版 4●)。



図版 4 遺跡を取り囲む「人間の鎖」(Círculo de Defensa Cholula 提供)

冒頭で示したとおり、その二日後、建設予定地での用地接收が強行された。州警察は遺跡周辺に到着すると、矢継ぎ早に荷台から金網フェンスの束を下ろし、対象区画を囲むように支柱と金網を立てていった。これを知った地域住民はすぐさま遺跡周辺に駆けつけ、金網と「官有地」と書かれた看板の撤去にかかった。土地権利者や「連絡会」メンバーだけではない、バリオの成員を含む多くの市民が警察の前に立ちはだかったのである。

市内の教会の鐘が打ち鳴らされたのもその日の夜だった。 Cholula では教会の鐘は、通常、ミサや祝祭の始まりを告げるものであり、それもバリオの祭礼職のみに許された任務である。その鐘

がミサも祝祭もない深夜に鳴らされたのは、チョルーラにしのび寄る危機を住民全体に知らせるためだった。

2014年10月3日、チョルーラの歴史で前例にない宗教的行事が行われた。サン・ペドロとサン・アンドレスの両市民合同による「聖母の下山(*la Bajada*)」である^(註12)。このときの「下山」は、事前に祭礼組織が準備を進めた定期的なものではなく、都市の危機的状況の解決を聖母に請願しようと「連絡会」が提案した例外中の例外だった。当初、「連絡会」の申し出に対して、バリオの長老や祭礼組織の役職者は、聖母への信仰に政治的問題を持ち込むべきではないと否定的な対応をした。しかし、この「下山」が住民全体の救済を祈るものであることを確認すると、長老たちも緊急の「下山」組織化に合意した。こうしてサン・ペドロ側とサン・アンドレス側の全18バリオから、祭礼組織の役職者と長老、さらにそれぞれの守護聖人像が担ぎ出される大規模な請願行列となった。

前述のとおり、サン・ペドロとサン・アンドレスは遺跡と伝統の正統性をめぐって歴史的な対抗関係にある。普通ならば、互いの祭礼や聖人行列はもちろん、競合相手の「下山」に参加することなどない。ところがこのときは、全バリオの守護聖人像の行列が聖母像とともにサン・ペドロとサン・アンドレスの両市内、およびテーマパーク建設用地をめぐる。

この「下山」には、政治的な意味を含む示威行為やプラカードは一切ない。いつもの楽隊もいない。行列のあいだ参加者の祈りの歌声がただ街路に響いていた。そして、遺跡近くの広場に集まると聖母を祝福する合同ミサが挙げられた。8000人にのぼる信者の祈りが聖母に向けられたのである[Ashwell 2015: 163-164]^(註13)。「人間の鎖」と「下山」には、歴史と文化的伝統をめぐる対抗関係を乗り越えて連帯を深めるチョルーラ市民の姿があった。伝統的な都市景観が失われてしまうかもしれないという危機的状況の経験を共有するなか、「守るべき遺産」という意識が彼らを結びつけたのである。

おわりに

経済の活性化と住民の社会参加を同時に推進しようとする「プエブロス・マヒコス」制度は、観光開発の地方分権を指向する試みとして、その理念は評価されるべきだろう。ただし、連邦政府主導という、20世紀の観光開発に特徴的だったある種の「くびき」から解放されたとき、州政府や市町村レベルの地方行政が既得権益を求めて力を振るうことがある。そうなった場合、地域住民にとって地方行政は対峙しなければならない障壁となる。チョルーラの事例はその典型といえるだろう。

本稿では、地方行政の強権発動とそれに抗する市民連帯の生成という構図を浮き彫りにしたが、それは都市景観と資源をめぐる官と民のあいだの意識の差異を反映している。

ここで改めて整理すると、「官」にとって都市景観とは、地域遺産を最大限に有効活用するための舞台である。チョルーラの場合、遺跡周辺の農地は、公共の利益を引き出す可能性を秘めた未開発の資源、とくに物質的な効用をもたらす生態資源としての意味が支配的であり^(註14)、そうであるからこそ、行政は強引な用地接収を正当化してまでテーマパーク建設を進めようとしているのだ。「官」にしてみれば、訪問客数の増加や経済効果という目に見える結果が期待される観光開発こそ、公共の利益をもたらす資源化の手段といえる。

一方、「民」にとって都市景観とは、多くの場合、あまり意識されることのない生活の体系の風景

である。 Cholulaにおいては、遺跡公園やマリーゴールドの花畑、聖母寺院を訪れる巡礼者や聖人像を担いだ行列は、生活に根ざした景観であり、日々の生活のなかにまるで空気のようにあたりまえの光景として埋もれてしまいがちである。しかし、ひとたび外部の脅威に晒され喪失の危機に瀕したとき、それは「守るべき遺産」の対象へと転化する。人びとはそれが Cholula独自の文化的景観であること、過去から継承され、そして未来へと伝えていかなければならないかけがえのない地域遺産であることを意識しはじめる。日常のあたりまえの光景から「守るべき遺産」へという、都市景観に向けられるまなざしの変化は、文化や歴史に対する自己評価のプロセスであり、それこそが文化の資源化にほかならない。

21世紀は、かつての観光政策のように、主要な遺跡が国家イメージや国民国家史観の構築に利用されるだけの時代ではない。遺跡を有する地域社会の住民が、遺跡を含む景観を「われらの遺産」として管理し、遺産を自分たちの歴史のなかに位置づけるとともに、未来への継承を主張することが可能な時代である。 Cholulaの事例からは、外部からの刺激を契機として、遺跡を含む都市景観に過去・現在・未来を結ぶ資源という新たな意味を読み込もうとする、地域住民による連帯の生成過程が明らかとなった。ただし、この問題が今なお継続中であることを忘れてはならない。多様な社会的主体は、互いを満足させる資源化の手段を導き出すことができるのか、今後の展開から目を離すことはできない。

註

- (註 1) 本研究は、科学研究費助成事業（新学術領域研究「植民地時代から現代の中南米の先住民文化：課題番号 26101005」）の助成を受けたものである。
- (註 2) 本稿で用いる社会主体という概念は、本特集の序論で鈴木が用いている「アクター」に相当する。
- (註 3) 本稿で一次資料として提示するものは、2015年2月～3月、同8月～9月に実施した現地調査で採録したデータに基づく。なお、個人情報保護の観点より、情報提供者の氏名や採録場所の詳細は伏せて掲載することとする。
- (註 4) 州知事による観光開発を象徴するのが2013年に完成した巨大観覧車「プエブラの星(Estrella de Puebla)」だろう。当初、プエブラ市歴史地区に建てられる予定だったが、学者や市民の猛反対を受け、最終的に郊外の複合商業施設に建設された。
- (註 5) 「プエブロス・マヒコス」認定件数のうち、遺跡を地域遺産として表明する市町村は多くない。メキシコ中央高原では、 Cholulaのほかにはメキシコ州マリナルコとモレロス州テポストラランが挙げられる。いずれも後古典期の遺跡を有する地域社会であり、本科研費研究では、古代遺跡の現代的活用をめぐる上記3件の比較研究を計画している。
- (註 6) 2012年に政権奪取したPRIは、ペニャ・ニエト大統領のもとプエブロス・マヒコス制度を発展的に継続させ、数年内に登録数100件を目指すことを表明している。ただし就任以降、追加の認定地はない。
- (註 7) 16世紀の年代記史料としては、Mendieta [2002 I: 92]、Motolinía [2007: 135]、Rojas [1985: 131-132]などで言及されているほか、 Cholulaの歴史的背景を簡潔にまとめた研究書としてはReyes [2000]やBonfil [1973]などが挙げられる。

- (註 8) 7つの文化とは、古代メキシコに栄えた文明、オルメカ、テオティワカン、ミステカ、トルテカ、サポテカ、マヤ、アステカを指す[Gobierno Municipal de San Pedro Cholula 2014: 11]。
- (註 9) 政府は適正価格による用地買収を提案しているというが、最初に示された額は1㎡あたり60ペソ(約5ドル)である。交渉により1㎡あたり150ペソ(約12ドル)にあがったが、平均市場価格が3000~5000ペソ(250~400ドル)であることを考えると、ほぼ強制接収であると考えてよい。買収に応じない場合、政府は土地権利証書の提出を求めた上で即時の納税を命じるが、多くの場合で書類上の不備が指摘される。高額におよぶ罰金や滞納分の支払いが要求されるため、土地権利者の数家族がすでに売却している。
- (註 10) 遺跡保全区域におけるテーマパーク建設をINAHが承認したことについて、INAHの研究者職員組合は、承認の撤回をINAH所長に要求している。矛盾ともいえるこの関係の背後には、INAHが一枚岩でないこと、つまり政府の一機関(役人)としての立場と、文化財保護の責任者(研究者)としての立場のあいだでの揺らぎが垣間見られる。
- (註 11) 既に政府による接収は済まされ、修道会および患者は他地域の施設へと移動させられた。2016年5月の開業を目指して現在は外壁や内装の補修が進められている[Metro Puebla 25/abril/2015]。
- (註 12) 「聖母の下山」は、寺院に祀られている聖母のレプリカ像を各バリオの教会へと担ぎ下ろす行列であり、バリオのあいだで決められた祭礼暦に沿って聖母像が一定期間バリオの教会に留まる。寺院を往復する聖母の行列には該当バリオの守護聖人の像の行列が付き添う。19世紀には早魘や伝染病に際して、都市を救済するための「下山」が実施された[Bonfil 1973: 145]。
- (註 13) プエブラ州自治大学の教員であり文化人類学者でもあるAnamaria Ashwellは、同僚のJulio Glocknerとともに、同大学の学生を動員しつつテーマパーク建設反対運動に関わっている。チョルウラの開発をめぐる「官」対「民」の構図に、「学」がどのように関与しているのかについては機会を改めて報告したい。
- (註 14) 本特集の序論、鈴木論文(p.●●)参照。

参考文献

ASHWELL, Anamaria

2015 *Cholula. La ciudad sagrada en la modernidad*, Instituto de Ciencias Sociales y Humanidades - BUAP.

BID (Banco Interamericano de Desarrollo)

2006 *Nota de política. El turismo como motor de desarrollo*, BID.

BONFIL Batalla, Guillermo

1973 *Cholula. La ciudad sagrada en la era industrial*. UNAM.

Gobierno de los Estados Unidos Mexicanos

2001 *Plan Nacional de Desarrollo 2001-2006*, Gobierno de los Estados Unidos Mexicanos.

2007 *Plan Nacional de Desarrollo 2007-2012*, Gobierno de los Estados Unidos Mexicanos.

Gobierno del Estado de Puebla

2014 *Indicadores básicos de la actividad turística en Puebla año 2014*, Secretaría de Turismo del Gobierno del Estado de Puebla.

Gobierno Municipal de San Pedro Cholula

2014 *Parque de las Siete Culturas. Rescate y Dignificación del Entorno de la Zona Arqueológica, Estudio económico, social y técnico*, Gobierno Municipal de San Pedro Cholula.

HERNÁNDEZ Flores, José Alvaro and Beatriz Martínez Corona

2011 “Disputas del territorio rural: La Cholula prehispánica frente a la expansión de la Puebla colonial”, *Agricultura, sociedad y desarrollo* 8(2): 281-296.

小林貴徳

2013 「ふたりのマリアとその「子どもたち」－祝祭都市 Cholula における過去の再構成をめぐって－」、*Constructing, Deconstructing, and Reconstructing Social Identity: 2,000 years of monumentality in Teotihuacan and Cholula, Mexico*, pp. 155-171, Cultural Symbiosis Research Institute, Aichi Prefectural University.

2014a 「Cholula の都市祭礼コミュニティバリオのこどもの結束カー」、石黒薫・初谷譲次編『創造するコミュニティラテンアメリカの社会関係資本－』、晃洋書房。

2014b 「メキシコにおける観光開発政策の転換と地域活性－「プエブロス・マヒコス（魅惑的な町）」プログラムの試み－」、天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし－再魔術化される観光－』、天理時報社。

MENDIETA, Fray Gerónimo de

2002 *Historia eclesiástica indiana*, Tomo. I, II, CONACULTA.

MOTOLINÍA, Fr. Toribio

2007 *Historia de los indios de la Nueva España. Relaciones de los ritos antiguos, idolatrías y sacrificios, de los indios de la Nueva España, y de la maravillosa conversión que Dios en ellos ha obrado*, Editorial Porrúa.

REYES García, Cayetano

2000 *El Altépetl, origen y desarrollo: Construcción de la identidad regional náhuatl*, Colegio de Michoacán.

ROJAS, Gabriel de

1985 “Relación de Cholula”, en *Relaciones geográficas del siglo XVI: Tlaxcala*, Tomo segundo, UNAM.

SECTUR (Secretaría de Turismo)

2001 *Programa Nacional de Turismo 2001-2006*, SECTUR.

2007 *Programa Pueblos Mágicos. Reglas de operación, Secretaría de Turismo*, [en línea], SECTUR, http://www.sectur.gob.mx/work/models/sectur/Resource/99fbd793-a344-4b98-9633-78607f33cb8f/Reglas_de_operacion.pdf.

2014 *Diario oficial*, 26 de septiembre de 2014, SECTUR.

関雄二

2014 『アンデスの文化遺産を活かすー考古学者と盗掘者の対話ー』、フィールドワーク選書6、臨川書店。

VELÁZQUEZ Garcia, Mario Alberto

2013 “La formulación de las políticas públicas de turismo en México. El caso del programa federal Pueblos Mágicos 2001-2012”, *Diálogos Latinoamericanos*, No. 21, Aarhus Universitet, Dinamarca, pp. 89-110.

山下晋司

2007 「文化という資源」、内堀基光編『資源と人間』（資源人類学01）、弘文堂。

原稿受領日 2015年9月25日

原稿採択決定日 2015年10月10日